

『とある男の独白』

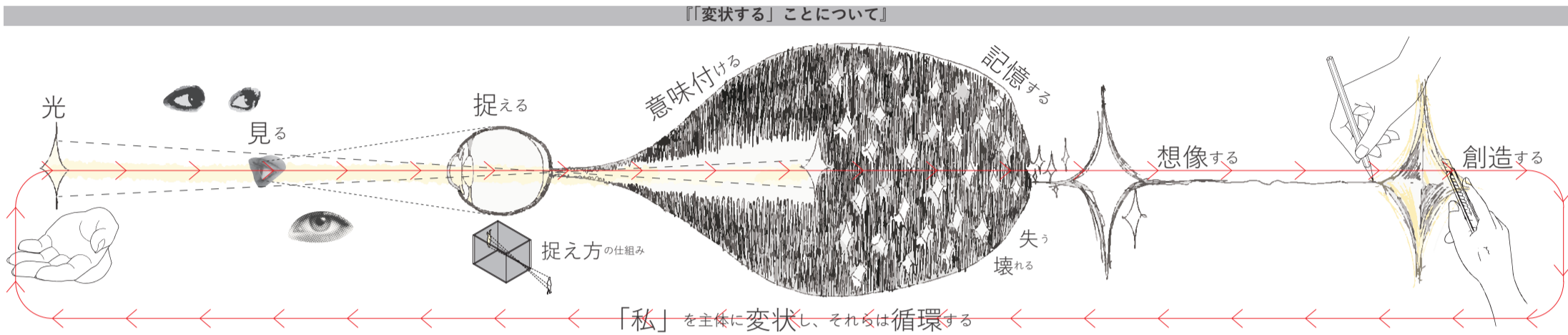
この世界は「不確か」である。映画や劇のように予定調和な世界ではなく、私と誰かが完全に理解し合うことも、私が私自身を直接見ることもできない。私も他者も世界も曖昧な場所に存在している。思えばこの世界に「確かなもの」はないのかもしれない。私は見ることで、観ることで「在る」ことを認識する。それは、見えるが実体がないものかもしれない。観えないが、実体が在るものかもしれない。私は、純粋な「在る」が観たかったのだ。

しかし、その純粋さは存在しない。なぜならば既に「在る」からだ。既に在るものを私は、真に純粋なものとしては見れない。その時点で、「確かなもの」は存在しないかもしれない。しかしながら、「確かなもの」というのはそういうことではない。私を繭のように包んでいる出来事、体験、関係性、そしてそれを通して、私の中に内在し、蓄積する記憶、創造する小さな世界、光の集合体、それこそが「確かなもの」と言えるのではないか。

光の見え方、観え方は人によって違う。構造は似ているかもしれない。涙を流す仕組みも一緒かもしれない。それでも私は私だと、私は在るのだと言いたい。「私」は自閉的で内向的だが、それでも世界と繋がっている。

「と在る」ことについて

- 失われた光のための家 -



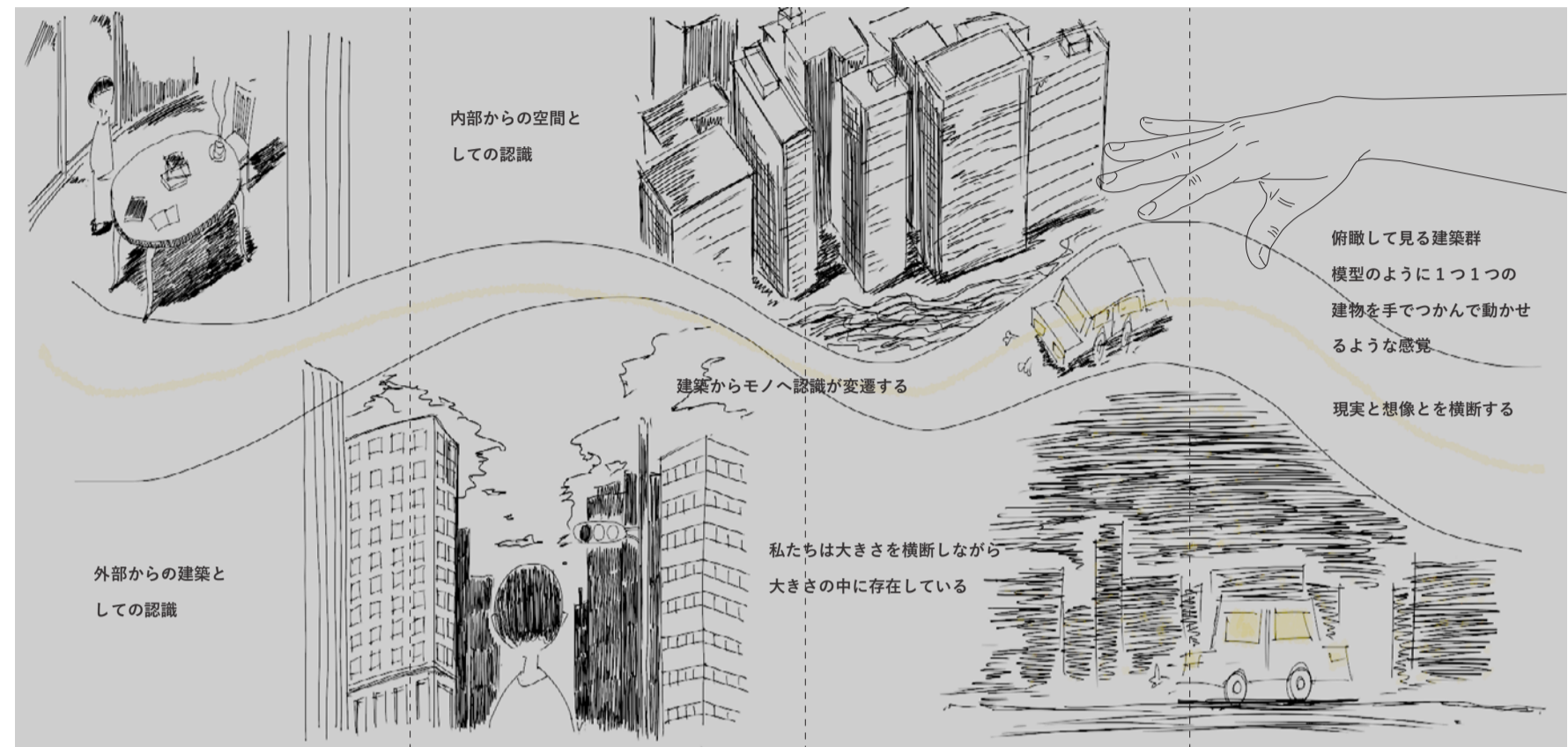
■ 「変状する」こと

<p>『「見る」ことについて』</p> <p>私たちは、瞳孔から入った光が眼球内で屈折し、網膜に像を結ぶ生理的仕組みによって世界を見ている。光は常にまっすぐ進み、私たちは光の結果を見ている。</p>	<p>『「捉える」ことについて』</p> <p>光が溢れた不確かな世界を自分の目で捉える。それを見ているのだと捉え、その像は私の中でぼやけた像として残る。これは、まるでピンホールカメラのような仕組みである。</p>	<p>『「意味付ける」ことについて』</p> <p>ギリシア語の冠詞が出来事を切り取り、名詞化し、対象として把持するように、捉えることと意味付けることを通して世界は「私の世界」として構成され、人称や数、距離、関係性が立ち上がる。</p>	<p>『「記憶する」ことについて』</p> <p>「捉えること」「意味付けること」を通して、私的な視点の記憶、すなわち「私の光」が蓄積されていく。それらの光は、それぞれ形状・状態・時間軸が違っており、様々な光を放ち、世界を構築している。</p>	<p>『「想像する」ことについて』</p> <p>蓄積された記憶（光）を媒体に私たちは、想像する。様々な分野の領域を横断し、あらゆる可能性を生み出している。私たち人間は考えることができる。そのうえで自分を更新し続けていく。</p>	<p>『「創造する」ことについて』</p> <p>想像したモノ・コトは、現実にあらゆる形で創造される。ある人は言葉で、ある人は製品で、ある人は藝術で、ある人は建築で誰かの何かのために創造される。これらは、また「変状」し、循環する。</p>
---	---	--	--	---	---

変状とは、私が意図して行為する以前に内で生じた出来事がすでに私自身を変えてしまっている状態を指す。

『「大きさを横断する」ことについて』

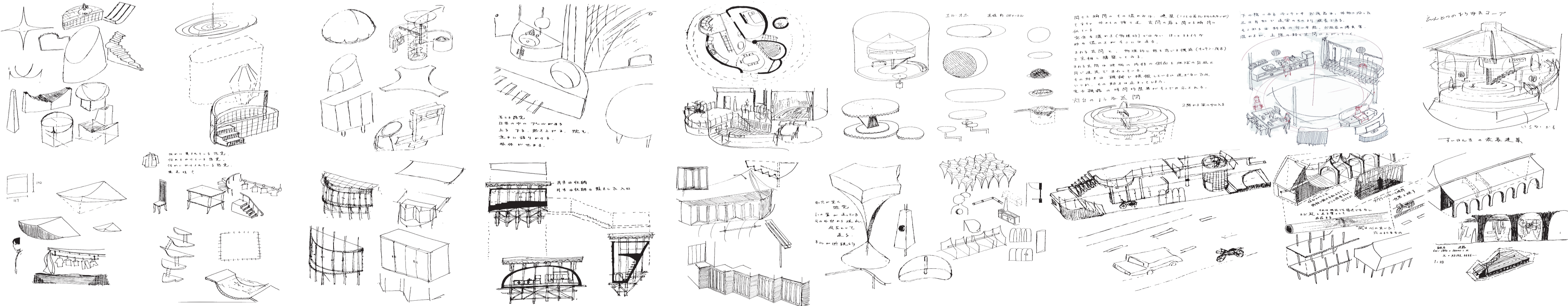
前段で述べた変状のプロセスは、人とモノの距離感が揺らぐ体験として現れる。その距離感が最も表れるのがスケールである。高速道路から街を見下ろすと、建築は実在しているのに、位置によって手で掴めそうに感じられ、模型のように操作可能なものとして知覚される。この距離感の変化によるスケールの誤認は、現実と想像を往復する体験である。建築は「リアリテースケール」と「イマジナリースケール」という二つの大きさを立ち上げ、本設計ではその関係性を重要な要素として扱う。



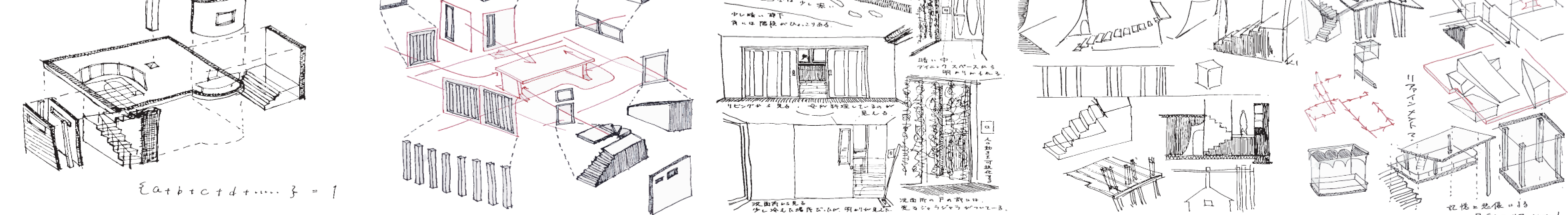
『設計プロセス』

本設計に用いるモチーフは、「変状」が顕著に表れた茶碗、炊飯器、シャツの胸ポケット、自転車、ダイニングテーブルの5つである。これらは、直近で壊れたモノであり、失われたモノである。すなわち「変状」したモノたちである。これらをもともと在った場所に失われた光のための「イエ」として「変状」し、還元する。

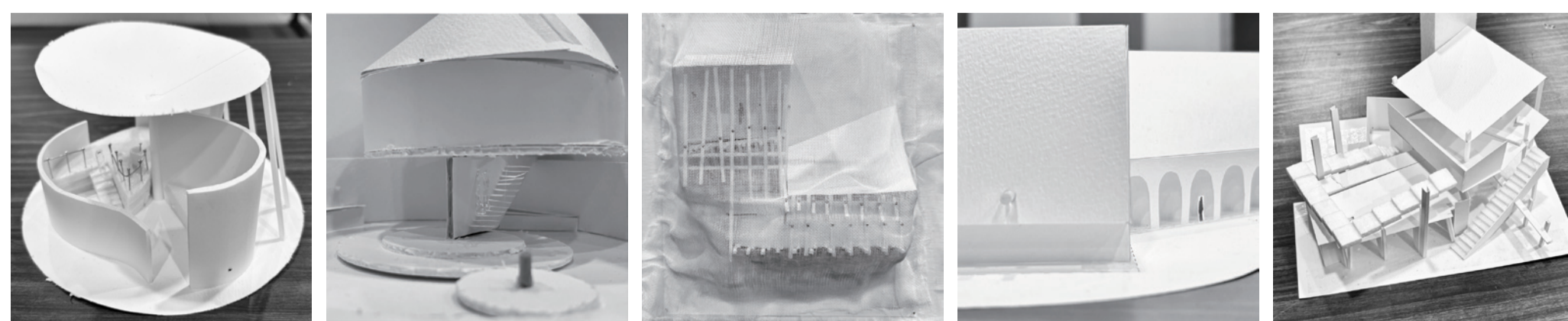
まずその「変状」における起こってしまった状態とそれらに対する記憶を軸にドローイングする。これによって生まれる空間や形態は、あくまで想像上であり、スケールとしては「イマジナリースケール」の範疇に収まる。そして、これらを現実世界に顕在化させる操作として、元のモノ自体の形態の外殻を繭のように覆わせる。そうすることにより、想像上であった空間が元の形態に戻らんとするような記憶的な再構築、いわば「変状」が起き、現実世界に意味付けることができるのである。そして、その外殻にはピンホールが空けられており、世界に一定の距離感を持ちながら、その世界がこちらに反映されている。捉えながらも世界はそれ以上に「私」と繋がっているのである。



私にとっての光は、よく見えてはいるけれど、よく見えない。よく見えないからこそ、よく見えてはいる。よく見えてはいるけれど、よく見えない。よく見えないからこそ、よく見えてはいる。



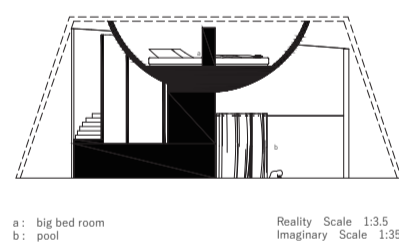
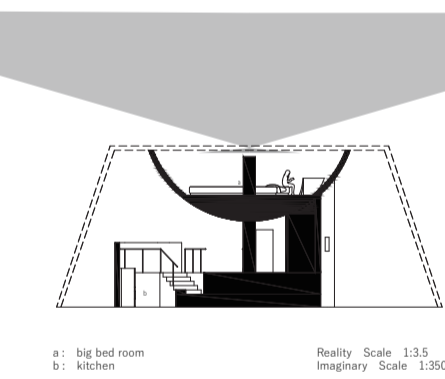
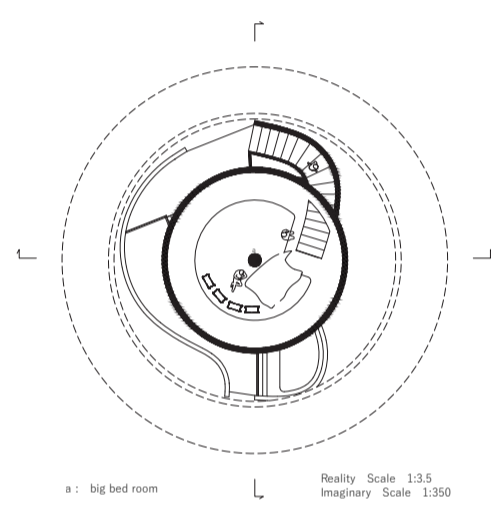
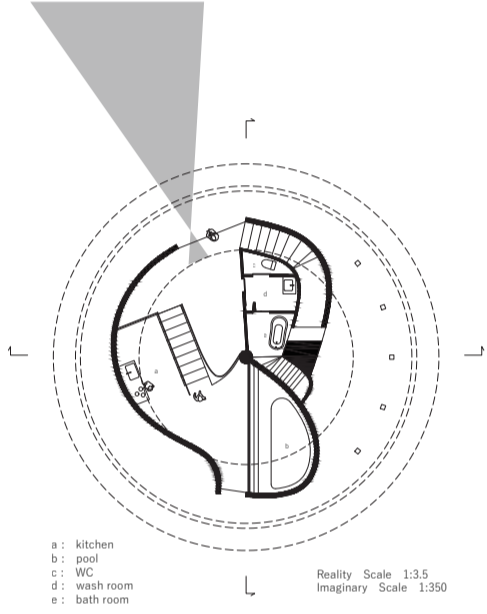
■ 変状の過程【ドローイング】



『割れた茶碗』

$$1 = \{1 + 1' + 1'' + \dots + n\}$$

1個の茶碗として存在していたが、落として割ってしまったため、n個の茶碗となった。その在り方の変化を主軸に空間を創造した。そのため、全体の構成は、割れたn個の破片が再び元の形に戻らんとするようなイメージを基に曲線という捉えきれない形態をした壁で空間内は分断されており、上を見上げると球体が眼前に広がる。家としての最低限の機能を持ちつつ、このイエには、大きなベットとプールが機能としての主軸になっている。「落ちる」という重力を感じさせるような感覚を日常の体験やその記憶からそれらの機能が空間の大きな要素となっている。

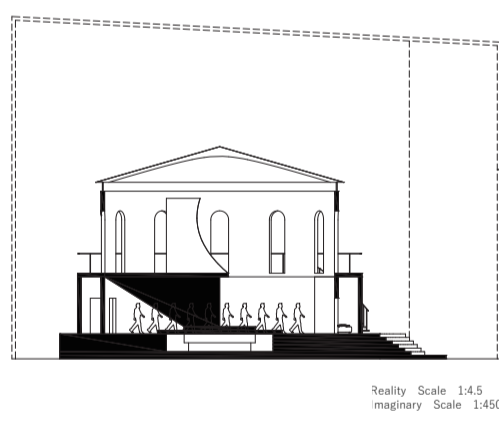
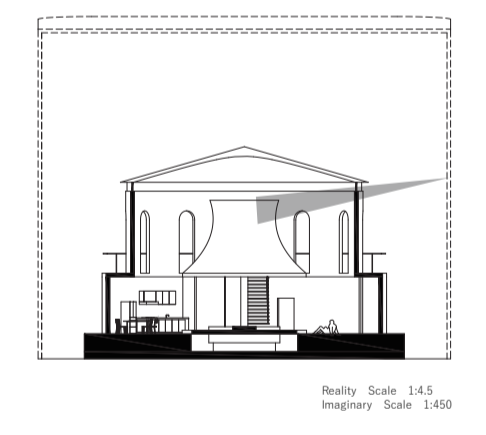
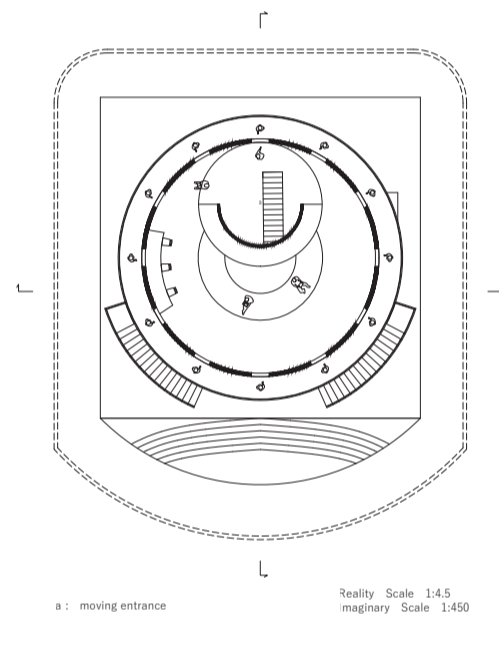
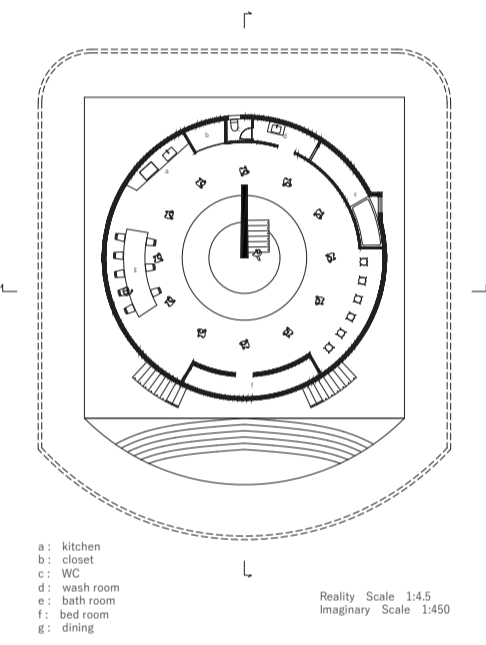


『壊れた炊飯器』

$$A \rightarrow B (A \times t w)$$

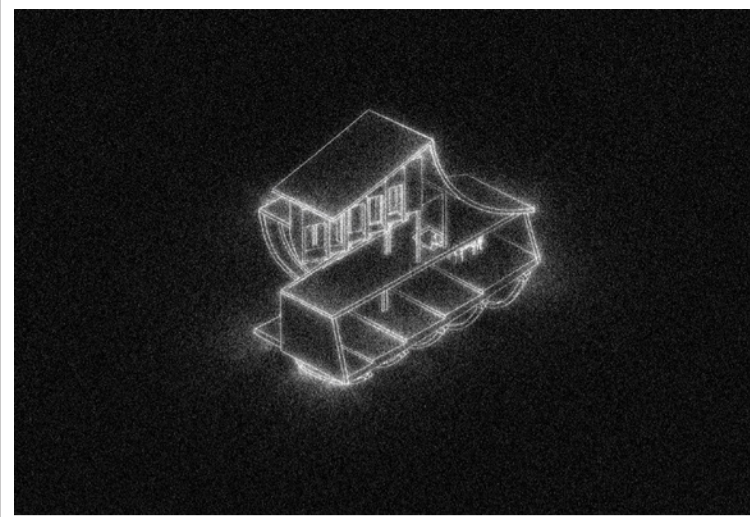


私の記憶にあるのは、冷たい水でといだお米が1時間後には、ふっくらと温かく美味しくなお米になっていたことである。これは炊飯器の仕組みというよりは、Aという状態のものに時間と電力を乗算した結果、Bという状態に変化するという魔法のようなものであるという記憶である。その温かみと機械的な仕組みを軸にまわる玄関を構成した。その玄関は円運動しており、1日で1周する。時間によってそのイエとしての温かみは、灯台のように目印となり帰ってくるモノたちを優しく包むだろう。玄関より下の空間には仕切りがなく、料理の匂いやお風呂の熱などの五感的な温かさが上層に広がっていく。

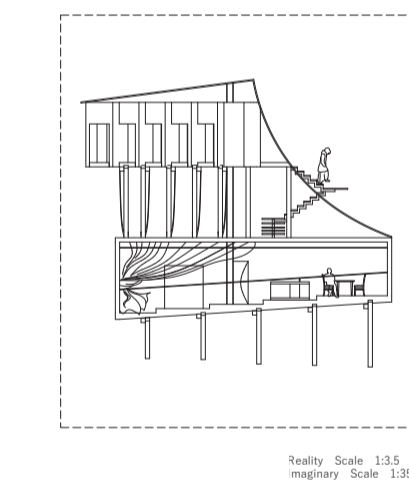
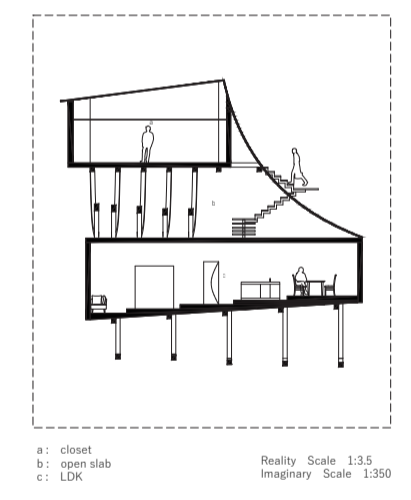
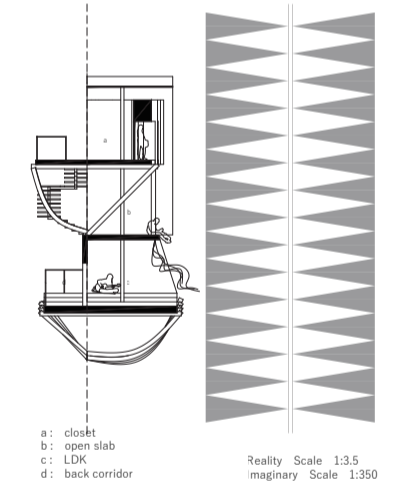
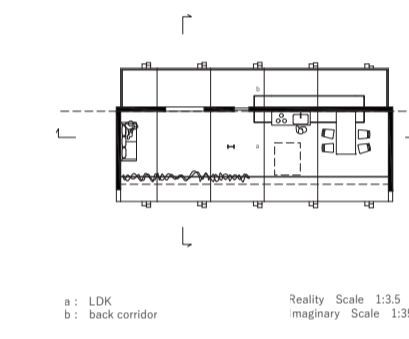
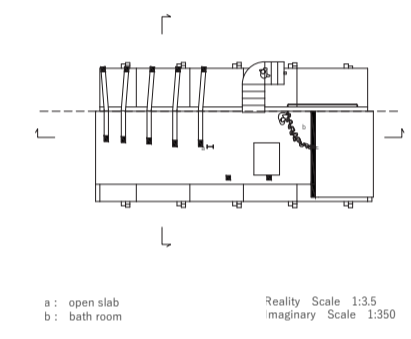
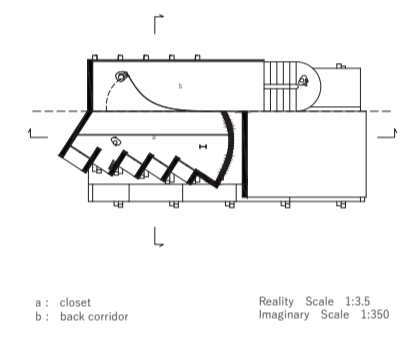


『破れた胸ポケット』

$$P \leftrightarrow Q$$



衣服における機能というより、意匠に近い役割を持つ。それが、急激な引張力により、破れてしまった。そうってしまった胸ポケットを私たちはどう捉えるか。みじめに見えるのか、はたまたファッションの一部として見るのか、もしくは不都合と見るか。しかし、よほどの破れ方をしない限り、手縫いやミシンで修復できる。意匠のように見え、破れると様々な捉え方にさらされ、修復するとまた元に戻る。重力に負けてしまう自立できないモノだが、それを保とうとする強い意思を感じる。そんな意匠と構造が表裏一体になっていて、拮抗しているイメージを軸にこのイエを設計する。



大きなベット

思わず飛び込んでしまいたくなるような大きなベット
日常のささやかな幸せ



プール

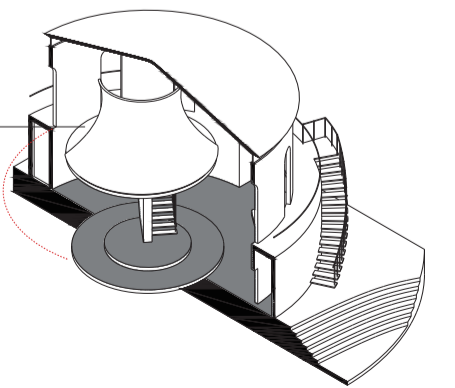
日常の中にある非日常
飛び込みたくなる感覚
音がないと中身を保持できない

垂直性のある空間

様々な段差がある生活
フロアレベル差のある関わり方
視線が交わる

まわる玄関

1日に2回転する玄関
家を出るとき、家に帰ってくる時、それは指標になる
まわるということにおけるワクワク感
今日の夕飯は何だろうか
ただいま

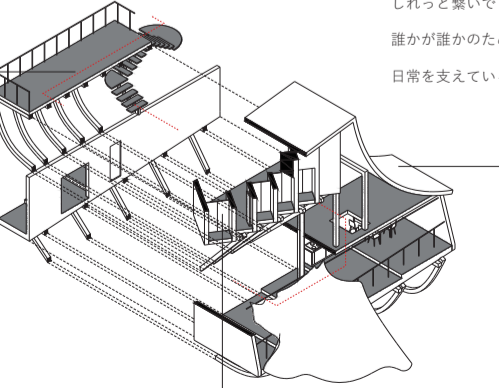


灯台のようなファサード

誰かの帰りを待つような佇まい
まわる玄関によって内部の灯は周囲を照らす
降り道を示す光
おかしなさい

裏地の空間

表に見えているモノは
もしかしら
目に見えない誰かの努力で
支えられているのかもしれない



つなぐ屋根

ふたつの空間をさりげなく
しれっと繋いでくれる
誰かが誰かのために
日常を支えている

クローゼットのような開口部

普段衣類を仕舞う建具
住んでいる私たちが仕舞われている感覚
そこで洗濯物を干す
朝日が目を覆う

